

霧以處爲名

〔萬葉集〕秋十相聞寄雨

九月ナガツキ四具禮シノ乃雨之山霧ヒヤ煙寸吾告胸ツケ誰乎見者將息ミヤ

〔千載和歌集〕冬六宇治にまかりて侍ける時讀る

中納言定頼

朝ぼらけ宇治の川霧たえぐに顯れ渡るせのあじろ木

霧以色爲名

〔日本書紀〕皇極二十四二年正月壬子朔一色青霧周起於地

〔日本紀略〕一昌泰二年七月一日壬辰巳刻黃霧四塞赤日無光○赤日常

雜載

〔改正月令博物筌〕三秋霧中略きりの色は物へだてたるをいふ霧の海渺々たる海のごとくなきりの立たる跡に物のぬるきりの香は霧に香ありきり立はへだてたる人はいふ霧の雲はる也川ぎりは川に立たる霧なり事をいふ霧の下道はきりの立たる下の道を行

〔肥前風土記〕基肄郡昔者纏向日代宮御宇天皇景巡狩之時御筑紫國御井郡高羅之行宮遊覽國

内霧覆基肄之山天皇勅曰彼國可謂霧之國後人改號基肄國今以爲郡名

〔播磨風土記〕賀毛郡小目野右號小目野者品太天皇神巡行之時宿於此野仍望覽四方勅云彼觀

者海哉河哉從臣對曰此霧也爾時宣云大體雖見無小目哉故號曰小目野

〔三代實錄〕清和二十八貞觀十八年正月三日辛巳日色變赤西京三條降霧陰蒙往還之人不辨其形須臾開霧日色復常

〔松屋筆記〕八十五霧に酔るを治方略中丹波わたりにては霧にあたりて死すものおほしそれ

には藥燕脂クネリベとてベニの下品なるを多くのめば解すといへり平常のベニにてもおなじ事也

〔萬寶鄣事記〕占天氣霧はれがたきは雨となるきりの内は風なしきりのはる時かせふく

〔延喜式〕八祝詞六月晦大祓十二月准之

國津神波高山之末短山之末爾上坐氏高山之伊穗理短山之伊穗理平撥別氏所聞食武

〔祝詞考〕中伊穗理はその山の氣騰イキムガリと云言を略たるにて即雲霧の事也常に烟にいふりといひ